

### 怪異を語る寺田寅彦

YOKOYAMA, Yasuko / 横山, 泰子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学 / INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

26

(発行年 / Year)

2024-02-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030870>

# 怪異を語る寺田寅彦

横山 泰子

## 1

物理学者兼文筆家として、寺田寅彦は怪異を積極的に語っていた。彼は音の怪異や河童等に興味を持ち、「怪異考」（昭和2〔1927〕年11月『思想』）「化物の進化」（昭和4〔1929〕年1月『改造』）等の随筆を残している。これらの随筆は比較的良好に知られているが、それ以外の作品でも寺田は怪異現象や化物を扱っている。

しかし、管見の限り寺田の怪異観や化物観の全体像をとらえようとする先行研究は見当たらない。本稿の目的は、寺田が生涯どのように怪異現象と向き合っていたかを時系列で整理し、彼の怪異観や化物観を明らかにすることである。そのうえで、寺田寅彦を近代の怪異研究史、妖怪学史の上で位置づけてみたい。なお、文献の引用にあたっては読みやすくするために、一部表記をあらためた箇所がある。

## 2 明治時代の寺田寅彦 神秘的世界への関心と文学

まず、寺田寅彦の人生について、簡単にまとめる。寺田寅彦は、寺田利正、亀の長男として明治11（1878）年に東京で生まれる。明治14（1881）年に高知に転居、明治29（1896）年に熊本第五高等学校に入学し、夏目漱石に俳句を教わる。明治32（1899）年に東京帝国大学物理学科に入学。正岡子規の知遇を得る。明治36（1903）年に大学卒業後、大学院へ進学し、音響学等の研究を行う。明治41（1908）年「尺八の音響学的研究」で理学博士

となる。明治 42 (1909) 年東京帝国大学助教授となる。この年から明治 44 (1911) 年までドイツ、イギリスへ留学する。帰国後教授となり、大正 6 (1917) 年に学士院恩賜賞受賞。大正 12 (1923) 年関東大震災にあい、震災被害調査を行う。東京帝国大学地震研究所、航空研究所、理化学研究所の所員も兼ねつつ文筆業も積極的に行い、昭和 10 (1935) 年に亡くなった。

寺田の生まれは東京であるが、子ども時代を過ごした土佐は彼にとって大切な故郷であった。彼は「化物の進化」でこう語っている。

郷里の家の長屋に重兵衛さんという老人が居て、毎晩晩酌の肴に近所の子供等を膳の向いに坐らせて、生のにんにくをぼりぼりかじりながらうまそうに熱い杯を嘗めては数限りもない化物の話をして聞かせた。想うにこの老人は一千一夜物語の著者のごとき創作的天才であつたらしい。そうして伝説の化物新作の化物どもを随意に眼前に躍らせた。われわれの臆病なる小さな心臓は老人の意のままに高く低く鼓動した。夜更けて帰るおのおの家路には樹の蔭、河の岸、路地の奥の到るところにさまざまな化物の幻影が待伏せて動いていた。化物は実際に当時のわれわれの世界にのびのびと生活していたのである<sup>1)</sup>。

寺田は近所の老人から様々な妖怪譚を聞かされ、「ゾッとする」感覚を味わったという。さらに中学時代、寺田は友人Nが創造した妖怪譚も聞かされていた。Nの話をも物理的実在としては信じなかったが、「われわれのうら若い頭に何かしら神秘的な雰囲気のようなものを吹き込んだ、あるいは神秘的な存在、不可思議な世界への憧憬に似たものを鼓吹したように思われる」と述べている。妖怪譚を通じ、日常世界のかなたに不思議な世界があるという憧れの感覚が涵養されたというのだ。

寺田の化物への関心は、若い頃の俳句にまずあらわれた。明治 31～33 (1898～1900) 年に作られた作例を挙げてみよう。

A 朧夜やお小夜狐は嫁入す<sup>2)</sup>

B 朧夜や狐嫁入なんどする<sup>3)</sup>

C 稲妻や五位鷲一羽鳴いて行く<sup>4)</sup>

D ものゝけの枕辺去らず稲光<sup>5)</sup>

E 化鷲を五位に叙す夜や稲光<sup>6)</sup>

F 寒月に腹鼓うつ狸哉<sup>7)</sup>

AとBは狐の嫁入りについてであるが、日本では闇夜山野等に出現する怪火を狐火、狐の提灯などと呼んだ。狐火が多く連なり、嫁入り行列の提灯のように見えるのが「狐の嫁入り」である。五位鷲（C、E）は、体が夜間青白く光るとされ、化物とみなされていた。Fの狸について。狸は腹を楽器のように打って楽しむとされ、通常聞こえない不思議な音が狸の仕業と考えられていたことによる。C、D、Eで稲妻が扱われているところに、彼の雷鳴への関心があらわれている。寺田の自伝的随筆「こわいものの征服」によると、臆病だったがゆえに雷鳴に恐ろしさを感じ、後には科学的な興味から空中放電現象を研究するようになったという<sup>8)</sup>。

坪内稔典は俳人としての寺田寅彦を「小型の漱石」と評している。幻想や神秘を好んだ漱石は新派俳人の中で特異な俳人だったが、漱石を通して俳句に入門した寺田も「幻想や神秘にひかれた」「新派の俳人としては異質」と坪内はいう<sup>9)</sup>。幻想や神秘を好む寺田が、怪光、怪火、怪音を句作に用いたのは大変興味深い。彼は夜の不思議な火や光、雷鳴等に特別な興味を持ち続け、後に物理学者として研究するようになるからである。

明治42（1909）年3月から明治44（1911）年6月まで、寺田が留学で日本を離れていたちょうどその頃、いわゆる「千里眼事件」が起こった<sup>10)</sup>。御船千鶴子が発明したという透視能力（千里眼）が世間で注目され、学者たちの関心もひきつけたのである。念写や透視の検証のため、東京帝国大学の物理学者たちも実験に関与した。もう一人の能力者・長尾いく子の実験時には、念写フィルム盗難事件が発生、刑事事件にまで発展して事件はスキャンダル性を帯びた。やがて千鶴子は自殺、いく子は病死した。心理学者の福来友吉は念写と透視を事実と主張し、東京帝国大学を退職した。

この騒動のピーク時、寺田寅彦はゲッティングに留学中であり、事件には関与していない。留学生仲間の高辻亮一の日記（明治44〔1911〕年）から、

留学生たちが日本の新聞から情報を得て、千里眼事件についても知っていたことが明らかだ<sup>11)</sup>。

2月5日（日）曇

林から借りた萬朝報を読む。早く読んで寺田君に渡しに行こうと思って大急ぎで読む。千里眼の研究はますます面白く、大問題になって来た。偽りだと言う者、真だと言う者色々で、学者及び警察の問題となり、三面記事は千里眼と相撲のもめごとで一ぱいになっている。学者は皆寺田君の知人なので、寺田君が早く読みたがっている。

高辻の日記では、留学生の林房吉は、高辻と寺田の送別会の席で時計の時刻をあてるという千里眼実験をしたが全然当たらず、逆に大受けしたことも書かれている。

その頃、日本では、東京帝国大学の物理学者、藤教篤・藤原咲平が共著『千里眼実験録』を刊行した。一柳廣孝はこの本に東京帝国大学理科大学の総意があらわれているとする。すなわち「千里眼——透視、念写——が存在する可能性は否定しない、しかし1911年現在の物理学の常識では許容し得ない」である<sup>12)</sup>。つまり、寺田が帰国した時には物理学者の千里眼事件に対するスタンスは上記の如く決まっていた。千里眼事件は学者を巻き込んだ社会的大事件であった。事件が終わった後、寺田も断片的ではあるが千里眼事件について語っている<sup>13)</sup>。

### 3 大正時代の寺田寅彦 ローマ字運動と随筆

帰国後の寺田の仕事で興味深いのは、ローマ字運動への関与である。明治時代、日本の近代化にともない、言語も改革する必要がうたわれた。難しい漢字のかわりにローマ字を国語表記の文字にしてはどうかという意見が出されるようになり、科学者も運動に関与した。杉山滋郎によれば、科学者は海外の研究者と英語でコミュニケーションをとらねばならず、国民全般に対する科学知識の普及啓蒙もしなければならなかった。そのため、日本語という

言語を堅持し、その表記のみ世界で広く使われるローマ字（アルファベット）にするという折衷案をとったという<sup>14)</sup>。恩師の田中館愛橘、田丸卓郎が熱心なローマ字論者であったことから、寺田もローマ字運動に関わっていく。寺田の伝記を書いた矢島祐利は

日本式ローマ字の機関誌「ローマ字世界」のために書いたローマ字文は明治四十一年から昭和十年に及びかなりの量に達してゐる。それは主に科学の分かり易い紹介であるが、中には随筆や詩や歌も入つてゐる。其の豊かな表現力を以て、日本文をローマ字で書く場合のよい見本を示してゐると思はれる<sup>15)</sup>。

と評している。事実、旧版の『寺田寅彦全集文学篇』の第十巻はローマ字綴りの文章で一冊となっており、寺田が多くのローマ字文を書いていたことに驚かされる。後の新版『寺田寅彦全集』では、ローマ字の巻の全文を邦字表記に書き改める方針で作られた（第9巻）。第9巻から、怪異と関わる作品を挙げてみよう。

まず「天狗になった三太郎の話（御伽噺） Tengu ni natta Santaro no Hanasi」（大正2 [1913] 年7月『ローマ字世界』）を紹介しよう。

普通の人間であった三太郎は、飛びたいと願っていると背中に羽が生えて飛べるようになった。そのうち、飛行能力を持ったがゆえに、周囲の人から嫌われてしまう。

飛んでいるうちに、妙なことに気がついた。三太郎が飛んでいると、往來の人が嫌な顔をして、「やあ、また木の葉天狗が飛んでいる」と言って、唾を吐いて、さも苦々しいといったように顔をそむけて行く。三太郎は「おや！」と思って思わず自分の顔を撫でてみたが、別に鼻も口も尖ってはいなかった。しかしその時から三太郎の心に一点の曇りが出来て、空を飛んでいても、今までのように、夢中になれなくなった<sup>16)</sup>。

三太郎は人々から「天狗めが！」と人から嫌われているうち、鼻が少しず

つ高くなってきたのに気づき、思い悩んでいるうちに心がまがり、顔も本当の天狗のような醜い顔になった。それでも飛び歩いていると、ある日の嵐に羽をくじいて川にはまって死ぬ。

寺田寅彦はどこからこの話を思いついたのだろうか。後の随筆「重兵衛さんの一家」に、子どもの頃に重兵衛さんから聞かされたお伽噺の一つに「しばてん（木の葉天狗）と相撲を取る話」を挙げている<sup>17)</sup>。しばてん（柴天、芝天）は「主に高知県に伝わる怪。小さい子供のような姿で、川の付近などで相撲を挑んでくる。これに応じると一晩中相撲をとらされたり、いつの間にか相手が棒や石などに変わっていたりする」<sup>18)</sup>。おそらく寺田は自分自身が聞いた話をもとに、天狗の話をふくらませたのであろう。

寺田のお伽噺に、千里眼事件が影響を与えた可能性も指摘しておきたい。千里眼事件は、特殊能力を持つと信じられた個人が社会の中で注目され、不幸な死を遂げた出来事であった。「天狗になった三太郎の話」の主人公も、飛びたいという純粋な願いから飛べるようになったが、その特殊能力ゆえに人間の世界では生きられずに死ぬ。主人公の設定が、千里眼事件を思わせるのである。

「狸の腹鼓 Tanuki no Haratudumi」（大正6～10 [1917～1921]年の間に書かれたと思われる）は「昔から、朧月夜に狸が腹鼓を打つということが多くの人に信じられていた。年寄りに尋ねて歩けば、これを聞いたという人はいくらかもある。詩的に見れば実に面白い味わいのあることである。少なくとも俳句になる」で始まる<sup>19)</sup>。寺田が狸の腹鼓を俳句に詠んでいたのは前述しておいた。この随筆で興味深いのは、後半部分で狸の腹鼓の現象を物理学的に説明しようと試みた点だ。朧月夜の晩は地面に風のない静かな場合で、「高い空の特別な温度や風の分布のためにいつもは聞こえない遠くの鼓や太鼓などの音が聞える」現象ではないかと推測している。

大正13（1924）年の「空気の中の怪物 Kuki no nakano Kwaibutu」は、空気中に含まれている塵に関する共同研究の話題である。空気中の未知の物質を米英の科学者が調べたところ、英国人の徹底した調査で植物の胞子であることが判明したという。内容は科学随筆であるが、「このようにして、この得体の分からない空中の怪物の正体が突き止められたのである」<sup>20)</sup>と、未

知の物質を怪物にたとえているところが興味深い。

このように、寺田寅彦はローマ字を用いてお伽噺や、科学随筆を書いた。これらの文章の中に既に、寺田寅彦の怪異観がみてとれる。もともと寺田は幻想や神秘を好んだ文学者としての面があったが、化物を素材にしたお伽噺まで作っていた。彼にとって化物は文学的素材として魅力的であったのだ。そして、科学が研究対象とする未知の物質や不思議な現象は、正体不明という意味では「怪物」と似ると考えた。「空气中の怪物」では、「怪物」がほぼ「化物」の同義語として使われている。

寺田は日常的にローマ字を用い、しばしば日記や手帳もローマ字で書いた。ローマ字で書かれた日本語の文章は、日本語ではあるが別物に見える。寺田は後に日本語の音と外国語の音の比較に興味を覚えるようになるが、その興味はローマ字の活用とも関係があるのではないだろうか。

#### 4 昭和時代の寺田寅彦 「怪異考」

昭和初期の寺田寅彦は怪異に凝っており、積極的に古文献を読んでいた。もともと神秘や幻想を好んではいたが、雑誌『思想』に随筆「怪異考」を書いたのは昭和2年のことだった。寺田は「怪異考」で「物理学の学徒としての自分は、日常普通に身近に起る自然現象に不思議を感ずる事は多いが、古来のいわゆる「怪異」なるものの存在を信ずることはできない<sup>21)</sup>と宣言する。祖先が多くの「怪異」に遭遇しそれを「目撃」して来たという人事的現象としての「事実」を否定するものではなく、「怪異現象の記録を現代科学上の語彙を借りて翻訳する」のだという。既に「狸の腹鼓」で、古くから伝わる怪異伝承を現代科学の言葉で説明する試みをしていたが、「怪異考」ではより本格的に挑戦している。

「怪異考」は二部構成になっており「その一」で自分の郷里で知られている「孕のジャン」を取り上げている。「ジャン」について、村上健司の『妖怪事典』は

ジャン 高知県高知市浦戸湾でいう怪異。海上でジャンジャン、ジャー



ンなどという音とともに、雷のようにパッと光る。この音が聞こえると、しばらくは不漁が続くという。物事がだめになるとことを「おジャンになる」というのは、このことから出た言葉だという。物理学者の寺田寅彦は、これを海底地震に関連した現象ではないかとしている<sup>22)</sup>。

と説明している。

「怪異考」で寺田は、「この話を導き出しそうな音の原因に関する自分のはじめの考えは、もしや昆虫かあるいは鳥類の群が飛び立つ音ではないかと思ってみたが、しかしそれは夜半の事だというし、また魚が釣れなくなるという事が確実だとすれば単に空中の音波のためとは考えにくいと思われた<sup>23)</sup>」と述べている。最初は「空中で生き物が出す音」として翻訳しようとしたが、不可能だと自らいうのである。続けてこう述べる。

ところが先年筑波山の北側の柿岡の盆地へ行った時にかの地には珍しくない「地鳴り」の現象を数回体験した。その時に自分は全く神来的に「笋のジャンはこれだ」と感じた。この地鳴りの音は考え方によってはやはりジャンとも形容されうる種類の雑音であるし、またその地盤の性質、地表の形状や被覆物の種類によってはいっそうジャンと聞こえやすくなるであろうと思われ得るたちのものである。

筑波山の柿岡での体験により、彼は直感で「ジャン＝地鳴り」説を思いついた。そして、自分の経験した音と震動について描写しながら、「要するに物理的には全くただ小規模の地震」とみなし、地球物理学的現象としての説明を試みている。

寺田は茨城県柿岡で「ジャン」を体験したというが、それはいつのことだろうか。柿岡には地磁気観測所がある。観測所の仕事のためにおそらく寺田は繰り返し柿岡に行っていると思われる。寺田寅彦の「怪異考」は昭和2(1927)年11月に発表されており、文中で「先年」とあるので、ジャン体験を昭和2(1927)年から数年前のことと仮定し、手帳類に柿岡訪問の記録がないかをさぐってみる。すると、大正13(1924)年9月22日の日記に「柿

岡へ土地見聞に行く、气象台へ貸す地面の見分なり」<sup>24)</sup>、また大正 15 (1926) 年のローマ字懐中日記に「1gt. 24 (Nitiyobi) Kakioka yuki」とある<sup>25)</sup>。おそらく、このどちらかの柿岡訪問時に、寺田は「ジャン」を体験したのではないか、と考えておく。

大正 15 (1926) 年 6 月に母を亡くした寺田は、埋葬のため故郷に帰っている。7 月 30 日の日記<sup>26)</sup>には「船を雇ふて浦戸湾内の磯の侵蝕の模様を見てあるいた」と書いている。郷里に帰って「孕のジャン」の伝承地に実際に行き、昔の話や柿岡での体験などを思い返していたのではないか。なお、この時、隣村出身の弟子・宇田道隆に対して海についての講義をし、「日本列島と地震の関係も重要です」<sup>27)</sup>と語ったという。

そして、同年 11 月刊行の『土佐史壇』17 号に郷土史家・寺内正路がジャンの考証を書いた。寺内の文は「怪異考」にも言及されている。寺田は刺激を受けて彼なりに考えていたのであろう。注目すべきは、彼が「ジャン」の伝承地、すなわち高知ではなく柿岡の経験から論じている点だ。伝承地ではない場所での個人的な経験から論を組み立てており、実証的とはいえないが、異なるものを直感で組み合わせているところにこそ寺田の個性が感じられる。

また、「怪異考」の後半では馬を襲って斃死させる魔物（「類馬」「堤馬風」）がとりあげられている。寺田は磯清の『民俗怪異篇』を読んでこの怪異について知り、考えついた仮説があると述べる。『民俗怪異篇』は昭和 2 (1927) 年 7 月刊行である。寺田の日記では、昭和 2 (1927) 年 8 月 22 日の日記に「「怪異考」のつゞきかく」とある<sup>28)</sup>。「ジャン」について書いた後、『民俗怪異篇』を読み、急遽続きを書いたものと思われる。

『民俗怪異篇』では、魔物が馬の鼻から入って尻に抜けると馬は即座に倒れる<sup>29)</sup>という。寺田は出現時間や出現場所、馬を救う方法などをから判断し、「なんらかの空中放電によるもの」ではないかという仮説を出している。そして

この仮説にとって重大な試金石となるものは、馬のこの種の放電に対する反応如何である。すなわち人間にはなんらの害を及ぼさない程度の放電によ

て馬が斃死し得るかどうかという事である。これについてはおそらく既に文献もある事と思われるが、自分はまだよく承知していない（中略）ギバの現象が現時においてもどこかの地方で存在を認められているか。もしいるとすればこれに遭遇したという人の記述を出来るだけ多く蒐集したいものである。読者の中でもしなんらかの資料を供給されるならば大幸である<sup>30)</sup>。

と書いている。実験室内で馬に電気を与える実験をしても、野外での現象を説明することはできないという寺田は、研究のための多くの資料を読者に求めている。雑誌『ローマ字世界』にローマ字文を發表するのと違い、一般紙『思想』に書けば反響を得られると考えたのであろうか。

## 5 昭和時代の寺田寅彦「化物の進化」

「怪異考」を書いた後、昭和4（1929）年に寺田は「化物の進化」を發表した。本稿の最初に紹介したように、この随筆は最初に人間文化の傑作として化物を位置づけ、「その出入りする世界は一面には宗教の世界であり、また一面には科学の世界である。同時にまた芸術の世界でもある」<sup>31)</sup>と書いている。既に寺田は得体の知れない自然現象を怪物すなわち化物としてとらえ、その原理を科学的に解釈する随筆を書いていた。一方で昔聞かされた怪談の文学性を理解し、俳句やお伽噺を実作していた。化物が科学と芸術の世界に出入りするという寺田の説は、これまでの彼の考えを端的に示している。

寺田が生まれ育った明治期には様々な化物が怖れられ、怪談にも現実味があった。文明開化の時代に人々は様々な迷信に惑わされており、哲学者井上円了が妖怪を合理的に説明する学問・妖怪学を提唱した。井上は不思議（妖怪）の実例調査の結果をまとめた『妖怪学講義』の刊行を開始し、当時不思議とされた現象を説明し、迷信を撲滅していったのである。そうした合理主義的な考え方が広まるうちに、化物の話は世間で忘れられるようになっていた。だが、寺田にとって化物の話は、自分に神秘的な存在、不可思議な世界への憧れをもたらした貴重なものであった。それゆえ彼は、科学が進歩したがゆえに、化物に対する世人の興味がなくなった時代を問題視しながら、文章

を書いている。

「化物の進化」では、「古人の書き残した多くの化物の記録は、昔の人に不思議と思われた事実の記録と見る事が出来る。今日の意味での科学的事実では到底有り得ない事はもちろんであるが、しかしそれらの記録の中から今日の科学的事実を掘り出し得る見込みのある事はたしかである」という。寺田は古文献を読み、「昔の人に不思議と思われた事実の記録」を探していたものと思われる。「化物の進化」でとりあげられたのは、「鎌鼬」「鸚鵡石」「石の喧嘩」「火山毛」「狸の腹鼓」「天狗」「河童」であった。

「鎌鼬」とは気づかぬうちに手足に切り傷ができるという怪異<sup>32)</sup>である。突風や旋風の中に潜むイタチの仕業と考えられたが、近代化の過程で、鎌鼬の正体を真空（風の内部に真空が発生し、人体に触れると皮膚が裂ける）とする説が出され、色々な人が検証を試みた。寺田も「化物の進化」で鎌鼬＝真空説を物理学者には少し腑に落ちないとし

これは明らかに強風のために途上の木竹片あるいは砂粒のごときものが高速度で衝突するために皮膚が截断されるのである。旋風内の最高風速はよくは分からないが毎秒七、八十メートルを超える事も珍しくはないらしい。弾丸の速度に比べれば問題にならぬが、玩具の弓で射た矢よりは速いかもしれない<sup>33)</sup>。

としている。そして、アメリカの気象学雑誌にあった事例（麦藁の茎が風で板戸に突き刺さった例）を出し、竹片が人間の肉を破るのもあり得ると述べている。

また、従来から強い関心を持っていた「狸の腹鼓」については「気温や風の特異な垂直分布による音響の異常伝播と関係のある怪異であろうと想像される」「このような現象でも精細な記録を作って研究すれば気象学上に有益な貢献をする事も可能であろう」という。寺田は昔の人に不思議と思われた現象の記録を集め精細に研究することで発見があると考えていた。きわめて科学的な発想である。

このように、怪異を説明する寺田であるが、「科学的説明が一通り出来た

としても実はその現象の神秘は少しも減じない」とし、本当の科学的研究は実はそこから始まると述べる。得体の知れない現象と日々向かい合う科学者は、不思議と思われる事実と戦っている。そのことを寺田は「現在の世界中の科学者等は毎日各自の研究室に閉じ籠り懸命にこれらの化物と相撲を取りその正体を見破ろうと努力している」という。寺田は過去の怪異現象の記録や先人の言い伝えを否定することなく、不思議と思われた事実の記録とみて重視した。そして、科学者としてその記録の活用方法を考えたのである。

## 6 昭和時代の寺田寅彦 光り物の研究

昭和6(1931)年頃、寺田が興味を持っていたテーマの一つが「光り物」である。『日本怪異妖怪大事典』では「空中を飛ぶ謎の光を『光り物』という。手の届く範囲から天空高くまで、飛ぶ高さや速さ、そして形状は様々である。光り物の概念は人魂や火の球と重なる部分を持つが、死者の魂と無関係な場合の方が多い。(中略)地震や火山の噴火など天変地異の前後に記録されることも少なくない。轟音を立てながら空を飛ぶなど、大気圏に突入した流星が起こす現象との共通点も指摘できよう」としている<sup>34)</sup>。空中を飛ぶ光にも様々なものがあり、様々な伝承もある。明治期の俳句にもあらわれているとおり、寺田は不思議な火や光全般に興味を持っていたが、特に昭和5(1930)年11月26日に発生した北伊豆地震(M7.3)を契機に、発光の研究に力を注ぐようになった。

北伊豆地震の際、発光現象を目撃したという証言が相次いだことに、寺田は多大な興味を示した。当時、地震と光に興味を持っていた人物に武者金吉(東京大学地震研究所嘱託)がいた。武者の指導にあたったのが寺田だったのである。武者の回想によると、地震と光り物というテーマは正当派の地震学者から毛ぎらいされており、研究所長に北伊豆地震の発光現象についての調査許可を求めたが、なかなか許されなかったという。

筆者は、さらに千里眼や万物環銀の例もあるから(と言っても若い読者には何の事かさっぱり分かるまいが)、私個人の名義で調査致しましよ

うかとお伺いを立てると、さすがは末広所長、構わぬ、地震研究所嘱託の資格でやれとキッパリ言って下さった。

と述べている<sup>35)</sup>。地震と発光現象は、千里眼に類似した怪しげなテーマとみなされていたのである。東京大学地震研究所の所員でもあった寺田は、地震と光り物というテーマに個人的な興味を覚え、武者を支えながら、自分自身も主体的に取り組んでいた。

この頃の武者と寺田の緊密な人間関係は、寺田の書簡からも読み取れる。11月27日に武者に手紙で「光り物の事、新聞にも房州(?)より見たる由の記事あり、貴兄の御実見により何等かの光現象ありし事は确实と存候(中略)なほ多くの実見者の所見を蒐集したきものと存候」<sup>36)</sup>と寺田は書き送っている。12月7日武者へあてた葉書には「光現象の其後考究を重ね候処、いよいよ空中放電が地震の為に起こるといふ可能性が確らしくなりました」<sup>37)</sup>と、自身の研究について述べている。

この頃、寺田は武者以外の人々へも、手紙で地震と光の興味を語っている。例を挙げてみよう。

昭和5(1930)年12月4日小宮豊隆宛 書簡 「僕は一つ地震と怪光との物理的關係を論じた珍説を出す腹案中。今迄は説明がつかないものだから一笑に附して問題にしなかつたらしい。古今東西の大地震の記録に到处に出てくる空の光り物を此れ迄みんな抹殺して居た。可哀さうだから怪光の為に弁護の労を取つてやるつもりであります」<sup>38)</sup>。

同年12月9日藤岡由夫宛葉書 「此数日間は、地震の為に空中が光るといふ学説(?)を捏造するために大車輪になつて居るので少し元氣であります」<sup>39)</sup>

同年12月22日中谷宇吉郎宛書簡 「『地震の光り物』といふテーマを得て、自分だけ面白がり色々小説的俳句的論文の趣向をこらし居候、どうも小生などは結局此んな事が一番がらに合つて居るのではないかといふ氣も致候」<sup>40)</sup>

寺田は地震の発光についてイタリア人 Galli の論文があると知り、イタリア語の勉強を開始し読解した。12月31日の日記には「午前 Galli の「地震の光物」の論文、よみつづく」と書き<sup>41)</sup>、同日の武者金吉宛書簡でも、辞書を引いて読んでいることが書かれている<sup>42)</sup>。武者は翌6(1931)年1月4日、寺田と会った時のことを武者は終生忘れることが出来ないという。

先生は膝の上に右のノートを開き、それを見ながらガリーの論文の内容を、イタリア語の知識のない筆者に、じゅんじゅんと話して下さるのであった。筆者は一言半句も聞き漏らすまいと体中を耳にして聞き入った。当時先生も筆者も、この問題に関して真剣そのものであった<sup>43)</sup>。

寺田は新聞に談話も発表していた。12月13日の『報知新聞』には、寺田の談話「大地震と光り物」が掲載された<sup>44)</sup>。内容は、大地震の時に光り物が見えたという古い記録が非常に多いが大部分の学者が問題にしていないこと、伊豆地震の発光現象について武者金吉のもとに500件もの目撃情報が寄せられたこと、地震の研究上かなり注目すべき現象で研究したいので、目撃した読者は情報を寄せてほしいといっている。

昭和6(1931)年1月1日の『日本消防新聞』にも彼の談話「地震に伴う光の現象」が載る<sup>45)</sup>。伊豆地震の発光は空中の放電であるという説を出し、ここでも読者に目撃情報の提供を依頼している。英語の論文も書き、『震研彙報』に載せた。火事と雷電による発光は問題にならず、送電線の接触または切断によるスパークが現象の一部を説明するが不十分で、①山崩れ地滑りにより起こる摩擦ルミネッセンス、②毛管電気現象の2つを考えられる原因として挙げている。そして、地震に伴う発光現象は幻覚ではないと述べ、武者金吉と多くの情報提供者への謝辞が記されている<sup>46)</sup>。

泊次郎は「地震研究所の所員のなかで、異色の存在であったのが寺田寅彦」と述べている<sup>47)</sup>。地震研究所にありながら地震予知が原理的に不可能であることを唱えたのが異色とされる由縁なのだが、当時嫌われた際物的なテーマを意欲的に掘り下げようとした点においてもまた、異色の科学者であったにちがいない。



発光現象の話を書き新聞に書いて読者から情報を得ようとした寺田は、データ収集に熱心であった。それほど、光り物全般に興味があったのだろう。上田寿は「寅彦には自然界における発光現象を単なる興味本位ではなく科学的に原因を追及して、災害防止に役立てようとする姿勢がみられる」と述べている<sup>48)</sup>。

なお、空中を飛ぶ謎の光り物が人の魂と結びつけられた場合「人魂」と認識されるが、寺田は人魂にも興味を持っていた。昭和8(1933)年の随筆「人魂の一つの場合」では、自分の子どもたちによる人魂目撃事件を考察し、人間の目の錯覚ではないかと考察し、暗室に色々な光帯を出現させて被実験者の感覚を記録する実験的研究をしてはどうかと述べている<sup>49)</sup>。不思議な光を災害と関連づけるのはもちろん、人間の感覚の問題としてもとらえようとしていた。

## 7 化物教育者としての寺田寅彦

自分が子ども時代に受けた「化け物教育」の意義をといた寺田は、実際に自分の教え子に化物の話をし、研究の可能性を語っていた。愛弟子の一人中谷宇吉郎の「寅彦夏話」には興味深いエピソードがある。雑談で寺田が化物の話(幽霊、海坊主、人魂)の話をしていたという<sup>50)</sup>。On Ignis fatuusという人魂の論文を読むようすすめられて図書室で捜して読んだところ「著者が人魂に遭ったのでステッキの先をその中に突っ込んでしばらくして抜いて先の金具を握ってみたら暖かった」というそれだけだったので「つまらなかった」と告げると「非常に重要な論文じゃないか。昔から人魂の中へステッキを突っ込んだというような人は一人もいないじゃないか」等と叱られたという。不思議な現象と思ったら、とっさに機転を利かせて実験するのが物理学者だと寺田は言いたかったのだろう。中谷はこれを「良い教訓」と思い出している。なお、寺田は「幽霊写真位、御希望ならいつでも撮ってみせるがね」と言っていたというが、写真を趣味としていただけにいわゆる心霊写真のトリックも理解していたらしい。

同郷の弟子宇田道隆は、寺田からシバテン、エンコウ、枕返しなどの変化



の話が聞かされた<sup>51)</sup>。そして「海坊主、船幽霊など海の怪を科学的に研究したまえ」「面白い海の怪異を研究したまえ。まとまったら僕が紹介してやろう。海は神秘だから、迷信を持ち易い。怪異談を産み易い精神状態に置かれるであろう」と言われていた<sup>52)</sup>。宇田道隆は師の教えを忠実に守り、海の怪異談を集めて文章を書いている。昭和22(1947)年7月の「海の幽霊」では

九州の西海ではソコユレイにつかれたということがある。船を漕いでも進まないという海の怪である。筑前沿岸にもヒキユレイ(ヒキというのは夜光虫で海面の光ることをいう)とって、夜海面一帯がボヤーンと白く光ったところへ船を乗り入るとさっぱり船が動かなくなる(とくに川口など北風の吹くとき多いようである)<sup>53)</sup>。

と事例を示し「水面の人影は自己自身の影を映して見ている」と海の怪異現象を合理的に説明している。まさに師のスタイルを踏襲しているのである。宇田はさらに『海と漁の伝承』(玉川大学出版部、1984年)で、全国漁村に残る様々な伝承の中に海の怪談も取り入れた。このように、寺田の化物教育が弟子たちに影響を及ぼしていたことがわかる。

昭和9(1934)年の「寺田寅彦先生談話会」の記録<sup>54)</sup>では、幽霊や人魂、蜃気楼等について、寺田が自由に語っている。写真にうつるものは物理の領分だと語り、「千里眼も写真に撮らなければよいが、これも写真にうつされるのでどうも」と言っている。自説を披露しながら、二人の物理学者が人魂を見た例を挙げ「人魂を否定することは出来ない。出来るだけ確かな人の材料を集めたいと思っています」「燐とか水素が燃えるということは現今の化学からは考えにくい」と述べている。光り物についても「こういうことをしらべるのは一番六かしい。全部がほんとか、全部が錯覚なのならよいが、両方がまざり合うからこまる」と言っている。寺田は、雑談の場で化物の話の後進に語って楽しんでいた。その姿はまさに化物教育者といってよいだろう。

## 8 妖怪学史における寺田の位置

以上述べてきたように、寺田は生涯を通じて怪異現象に興味を持ち、科学者として研究しつつ独自の啓蒙活動も行った。こうした人物——文理融合型の知識人——は、近代妖怪学の歴史の上でどのように位置づけられるだろうか。日本で最初に妖怪学という学問を提唱したのは前述したとおり、井上円了である。小松和彦は円了の研究を

妖怪現象や妖怪存在を信じる人々に対して、科学的知識を動員してそれを否定していく研究である。簡単にいえば、妖怪を「迷信」としてとらえ、それを科学で撲滅し、人々を迷信から解放しようという目的での「妖怪学」である。(中略) 妖怪を信じる人々のそれまでのコスモロジー、つまり世界の認識の体系を破壊し、近代の科学的・合理的なコスモロジーを身につけさせようとするわけである。日本で最初に「妖怪学」という学問を提唱した井上円了の妖怪学は、このような意味での妖怪学であった<sup>55)</sup>。

と説明する。かくのごとき井上円了の妖怪学は、柳田國男(1875～1962)によって批判された。柳田は妖怪を迷信とみなして撲滅すべきとみなすとは考えなかった。『妖怪談義』自序で、「我々の畏怖というものの、最も原始的な形はどんなものだったろうか」<sup>56)</sup>と考察しようとした。小松和彦のまとめによると、柳田も「妖怪学」という呼称を使ったが、独立した学問とは考えず民俗学の一分野として位置づけようとした。その理由は、柳田が発見し学問の対象としたのは、妖怪を信じその伝承を豊富に持っていたが近代化によって否定されようとしていた「民俗社会」であったからだという。柳田の研究が強調したのは、第一に全国各地の妖怪種目(種類)を採集し分布を知ること、第二に妖怪と幽霊の区別をすること、第三は妖怪の発生を神の信仰の衰退とみなすことであった。第一点は研究上の基礎作業であり、今日でも重要なこととされているが、第二、第三の点については異論も出されている。<sup>57)</sup>

以上の妖怪学の流れのうえで、寺田寅彦を位置づけてみたい。まず、寺田寅彦は1878年生まれで、井上とは20歳、柳田とは3歳の年齢の開きがある。井上は大正8（1919）年にこの世を去ったが、柳田も寺田も妖怪撲滅時代の後を生きた同時代人である。両者とも化物の話がもはや時代遅れであることを意識していた。彼らは子ども時代に知っていた妖怪の話が消えていくのを実感する世代で、失われる前に語っておくべきという感覚を共有していたと思われる。寺田はもともと民俗学に興味があり、柳田学に親和的であった。

柳田は日本全国の妖怪の名前や言い伝えを集めるといふ、基礎作業を行った。昭和13年から14年にかけて「民間伝承」に書いた「妖怪名彙」は、できるだけ多くの妖怪の名と説明を集めようと試みたものであった。寺田は留学経験を持ち、ローマ字で文章を書き、諸外国語に通じており、比較言語学的観点から名称全般に興味を持っていた。両者とも名前に関心を示したという点において、共通していた。もっとも、寺田の場合は諸語比較の可能性を示唆し、「化物の進化」においては日本語の「酒吞童子」とマライ語の「恐ろしき悪魔」、「源頼光」の音読とヘラクレス、「カップ」とインド辺の国語の「カチファ（海亀）」の類似を指摘する<sup>58)</sup>。寺田の随筆は思いつきを記すにとどまっているが、柳田が妖怪名を日本国内で収集することに熱心であったのと比べると、外国語で比較を試みる寺田は目指すところが違っていたとわかる。

柳田が井上を批判したのに対し、寺田は怪異現象を科学的に説明する井上の方法を継承し、物理学者として発展させようとしたといえる。井上の『おばけの正体』（大正3年）は130の短い章からなり、維新後に起こった怪異現象一つ一つの原因を解明した書である。その中に「狸の腹鼓」がある<sup>59)</sup>。円了は山形県庄内で起こった怪音（秋の快晴の夜トントンという音が遠くなったり近くなったりして聞こえる）が狸の腹鼓とされていたことを取り上げる。そして、その音源は鍛冶屋の鞆であり、風の都合、天気都合で聞こえたり聞こえなかったりすると説明している。実に要領を得た説明である。では、井上によって「狸の腹鼓」は以上で説明され尽くし、語るに足らない現象だと言い切れるのだろうか。寺田はそうは考えなかった。風や天気都合で遠くの音が聞こえたり聞こえなかったりするのは、寺田にとっては常識

であったが、「化物の進化」で「このような現象でも精細な記録を作って研究すれば気象学上に有益な貢献をする事も可能であろう」<sup>60)</sup>と、さらなる研究の可能性を指摘しているのだ。

怪異を科学的に説明することにおいて、寺田は専門家としての自負を持っていた。前述したように「化物の進化」では、「いわゆる科学的説明が一通り出来たとしても実はその現象の神秘は少しも減じないばかりでなくむしろますます深刻になるだけ」<sup>61)</sup>と述べられている。つまり、不思議な現象をわかりやすく説明して終わらせるのではなく、さらに深く問題を研究するのが科学の営みだというのだ。このようにプロの物理学者としての寺田は、井上の妖怪学の科学的・合理的な面を継承しつつ、さらなる科学研究の可能性を見出した。「化物の進化」には「学問上の問題の導火線となり得る事だけは確かである」「場合によっては海洋学上の貴重な参考資料にならないとは限らない」などの表現が散見される。自分の思いつきを文章に記すことで、次世代に妖怪研究を託しているのである。

寺田寅彦の近現代の妖怪学における最大の貢献は、昔の怪異現象の記録から科学研究ができるとして、アイデアを示したところにあると思われる。事実、寺田の文章は、現代の研究者に刺激を与えている。例えば、間城達男は『天気 地気(上)』で、「怪異考」で寺田がとりあげた「ジャン」という現象の体験者の証言を記し、寺田説をさらに考察している<sup>62)</sup>。ローマ字随筆「狸の腹鼓」に刺激を受けた横井雅之は、音響工学的な観点から、狸の腹鼓の音の性質と発生メカニズムを突き止めようと試みている<sup>63)</sup>。音の周波数分析の結果、巷に流布される「狸の腹鼓」の効果音が小鼓の「ボン」に近く、人間が自分の腹を叩いた時の音が狸の腹鼓として用いられる「ポンポン」に似ることを述べている。

「化物の進化」において寺田は「文政七年八月十四日に毛が降った」という情報を、火山毛(ペレーの毛)と説明した。この記述に興味を持ち、徹底した史料調査を行ったのが小泉潔である。小泉は文政七年に江戸に降ったという「毛」は火山噴出物であるペレーの毛とは考えられないと述べ、さらに鳥取県立博物館所蔵の「毛」の現物調査を行い、問題を整理している<sup>64)</sup>。

古生物学者の荻野慎譜は、寺田の昭和8年の随筆「神話と地球物理学」を

読み、寺田説を補強している<sup>65)</sup>。寺田は、神話の中に国々の気候風土の特徴が現れていることを指摘し、ヤマタノオロチの描写が火山活動をもとにして記述されているのではないかと述べた。荻野は寺田以後の火山学の成果をもとに、寺田説を裏付け、さらに自説を展開している。

寺田は幻想文学を好み、小泉八雲の作品も読んでいた。八雲の歿後30周年の記念出版『妖魔詩話』が、長男・小泉一雄氏の解説付きで部数限定出版された際、紹介文を書いている（「小泉八雲秘稿画本『妖魔詩話』」。文中で、寺田は『妖魔詩話』には八雲の手描きの妖怪画が含まれているのに注目し、日本の妖怪を描いているが西欧的であることを指摘している<sup>66)</sup>。文学研究者の田中貴子は、寺田の感覚を是としたうえで、『妖魔詩話』の船幽霊に注目した議論を展開している<sup>67)</sup>。寺田の守備範囲は極めて広く、アイデアも多岐にわたっており、多くの人に様々な手がかりを与えているのである。寺田説を鵜呑みにするのではなく、読者が自分の興味関心にあわせて読めば、さまざまな研究の可能性が見えてくるだろう。

以上、様々な分野の研究者が寺田の文章を活用しながら、研究をすすめている例を挙げた。学問がすすんでいくことによって、寺田説の誤りが見つかることもある。「化物の進化」では寺田は鎌鼬を「小さい物質が人体にぶつかる現象」として説明したが、この説はあまり普及せず、現代では気象学者たちによって否定されている<sup>68)</sup>。

本稿では、寺田寅彦が生涯どのように怪異現象と向き合っていたかを整理し、彼の怪異観や化物観を明らかにするとともに、研究史の上に位置づける試みを行った。寺田の怪異観を考察することは、幻想や神秘にひかれた寺田の文学者としての面と、物理学者としての面を総合的に把握することにつながる。本稿では寺田の夢や幻覚など、幻想的な作品に言及できなかった。今後の課題としたい。

寺田が生まれた明治時代は近代的学術の黎明期であった。彼は文系理系の枠にとらわれない、広い視野を持っていた。寺田とほぼ同時代を生き、留学経験を持った生物学者に南方熊楠（1867～1941）がいる。南方は民俗学に関心を持ち独自の学問体系をつくったが、心霊現象に関心を持ち、妖怪や霊について考察していた。近年では興味深い調査研究の成果が出ている<sup>69)</sup>。

寺田や南方のように総合的な知を目指した先人の仕事を全体的に把握し評価する試みは難しいが、学問が細分化された現代に必要ではないだろうか。

## 註

- 1) 『寺田寅彦全集 第2巻』岩波書店、1996年、39頁。
- 2) 『寺田寅彦全集 第11巻』岩波書店、1997年、39頁。
- 3) 同上、45頁。
- 4) 同上、60頁。
- 5) 同上、60頁。
- 6) 同上、82頁。
- 7) 同上、97頁。
- 8) 前掲『寺田寅彦全集 第2巻』所収。
- 9) 前掲『寺田寅彦全集 第11巻』解説。
- 10) 千里眼事件については、一柳廣孝『<こっくりさん>と<千里眼>・増補版』青弓社、2021年を参照。
- 11) 高辻玲子『ゲッティンゲンの余光』中央公論事業出版、2011年、184-190頁。
- 12) 前掲 一柳、124頁。
- 13) 寺田は大正14年に随筆「路傍の草」で「嘘もしょちゅうついているとおしまいには自分でもそれを『信じる』やうになるというのは、よく知られた現象である。色々な『奇跡』例へば千里眼透視術などをやる人でも、影にかくれた助手の存在を忘れて、本当に自分が奇蹟を行っているような気のする瞬間があり、それが高じると、自分ひとりでもそれが出来るやうな気になる瞬間もあり得るものらしい」(『寺田寅彦全集 第3巻』岩波書店、1997年、179-180頁)と書いている。寺田は千里眼を物理学的現象ではなく、心理学的現象として考えていたのであろう。
- 14) 杉山滋郎「科学者たちの選択：ローマ字運動の歴史が科学技術コミュニケーションに示唆するもの」『科学技術コミュニケーション』3号、2008年。
- 15) 矢島祐利『寺田寅彦』岩波書店、1967年、111頁。
- 16) 『寺田寅彦全集 第9巻』岩波書店、1997年、20-21頁。
- 17) 『寺田寅彦全集 第1巻』岩波書店、1996年、218頁。
- 18) 小松和彦監修『日本怪異妖怪大事典』東京堂出版、2013年、283頁、「しばてん」小澤葉菜筆
- 19) 前掲『寺田寅彦全集 第9巻』329頁。
- 20) 同上、272頁。
- 21) 前掲『寺田寅彦全集 第2巻』24頁。
- 22) 村上健司『妖怪事典』毎日新聞社、2000年、184頁。
- 23) 前掲『寺田寅彦全集 第2巻』27頁。
- 24) 『寺田寅彦全集 第22巻』岩波書店、1998年、86頁。
- 25) 『寺田寅彦全集 第24巻』岩波書店、1999年、82頁。
- 26) 前掲『寺田寅彦全集 第22巻』128頁。
- 27) 宇田道隆編著『科学者 寺田寅彦』日本放送出版協会、1975年、32頁。
- 28) 前掲『寺田寅彦全集 第22巻』149頁。
- 29) 磯清『民俗怪異篇』磯部甲陽堂、1927年、1頁。
- 30) 前掲『寺田寅彦全集 第2巻』33-34頁。
- 31) 同上、35頁。
- 32) 前掲『日本怪異妖怪大事典』151頁、「かまいたち」飯倉義之筆

- 33) 前掲『寺田寅彦全集 第2巻』42頁。
- 34) 前掲『日本怪異妖怪大事典』464頁、「ひかりもの」今井秀和筆
- 35) 武者金吉『地震なまず』明石書店、1995年、63頁。
- 36) 『寺田寅彦全集 第28巻』岩波書店、1999年、333頁。
- 37) 同上、339頁。
- 38) 同上、337頁。
- 39) 同上、340頁。
- 40) 同上、344頁。
- 41) 前掲『寺田寅彦全集 第22巻』192頁。
- 42) 前掲『寺田寅彦全集 第28巻』350頁。
- 43) 前掲『地震なまず』64頁。
- 44) 『寺田寅彦全集 第15巻』岩波書店、1998年所収。
- 45) 同上。
- 46) Torahiko Terada, "On Luminous Phenomena Accompanying Earthquakes", 『震研彙報』9巻3号、1931年。
- 47) 泊次郎『日本の地震予知研究史 明治期から東日本大震災まで』東京大学出版会、2015年、159頁。
- 48) 『寺田寅彦全集 第15巻』337頁。
- 49) 前掲『寺田寅彦全集 第2巻』所収
- 50) 中谷宇吉郎『寺田寅彦 わが師の追想』講談社学術文庫、2014年所収。中谷は一般書『雷』（岩波新書、1939年）で、寺田の実験等に言及しつつ、球電（球雷。空中を発光体が浮遊する現象）や聖エルモの火（船のマストの先端などに小さい火が見える現象）の説明を行っている。その説明方法に寺田の直接的な影響がうかがえる。
- 51) 宇田道隆『寺田寅彦との対話』弘文堂、1950年、45頁。
- 52) 前掲『科学者 寺田寅彦』237-241頁。
- 53) 宇田道隆『海の歳時記』法政大学出版局、1956年、68頁。
- 54) 前掲『寺田寅彦全集 第15巻』所収。
- 55) 小松和彦『妖怪学新考』講談社学術文庫、2015年、15頁。
- 56) 『柳田國男全集6』ちくま文庫、1989年、13頁。
- 57) 前掲『妖怪学新考』19-20頁。
- 58) 前掲『寺田寅彦全集 第2巻』37、48頁。
- 59) 『妖怪学とは何か 井上円了精選』講談社学術文庫、2023年、195頁。
- 60) 前掲『寺田寅彦全集 第2巻』47頁。
- 61) 同上、43頁。
- 62) 間城龍男『天気 地気（上）』間城龍男、1996年。
- 63) 横井雅之「「狸の腹鼓の音」について」『大阪産業大学人間環境論集』18号、大阪産業大学学会、2019年。
- 64) 小泉潔「江戸に降った毛—江戸（東京）にペレーの毛が降った？」『地学教育と科学運動』68号、地学団体研究会、2012年、67-77頁。同「江戸に降った毛—江戸（東京）にペレーの毛が降った？その2—」『地学教育と科学運動』69号、地学団体研究会、2013年、89-98頁。
- 65) 荻野慎譜『古生物学者、妖怪を掘る』NHK出版、2018年、44-47頁。
- 66) 『寺田寅彦全集 第16巻』岩波書店、1998年所収。
- 67) 田中貴子「八雲の描いたお化けの絵—「妖魔詩話」をめぐる」『文学』10巻4号、2009年、54-65頁。
- 68) 鎌鼬の近現代の解釈史については、飯倉義之「鎌鼬存疑 「カマイタチ」現象真空説の受容と展開」小松和彦編『妖怪文化の伝統と創造』せりか書房、2010年所収。



- 廣田龍平『妖怪の誕生』第5章、青弓社、2022年を参照。
- 69) 伊藤慎吾・飯倉義之・広川英一郎『怪人熊楠、妖怪を語る』三弥井書店、2019年。  
伊藤慎吾『南方熊楠と日本文学』勉誠出版、2020年。志村真幸『南方熊楠のロン  
ドン』慶應義塾大学出版会、2020年、同『熊楠と幽霊』集英社、2021年等。



&lt;ABSTRACT&gt;

**Terada Torahiko, Thinker on Mysterious Phenomena**

YOKOYAMA Yasuko

This paper discusses Terada Torahiko's view of mysterious phenomena. Terada, as a professional physicist, was interested in natural wonders and tried to study supernatural phenomena such as willo-o'the wisp, or ignis fattus.

Terada often heard fairy tales or nursery rhymes about monsters from his neighbor when he was young. Thanks to these old tales, Terada took an interest in mysterious natural phenomena and began studying natural science to be a physician. From this personal experience, he recognized that folklore about monsters cultivates children's curiosity and imagination. In Terada's younger days, he was taught literature by Natsume Soseki and wrote haiku. He composed fantastic haiku using monsters or animals with mysterious powers. Moreover, Terada wrote an original nursery tale about the Tengu, a long nosed goblin.

Terada also wrote many essays on science to enlighten the public. Some of his essays dealt with strange incidents in ancient times. In his *Kaii-ko* (「怪異考」 Views of Mysterious Phenomena) and *Bakemonono shinka* (「化物の進化」 The Evolution of Monsters) he tried to explain several mysteries, such as echos (sounds caused by the reflection of sound waves) or The Goddess Pele's hair (fine threads of volcanic glass), using a modern science approach. Terada liked to read old documents on supernatural events as scientific data. According to Terada, past supernatural seemed to involve gods or magic, but they could be clarified by modern science. Terada's essays are wide-ranging and still provide us with a lot of ideas.